

On the Definition of Virtue in Meno

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9831

『メノン』における「徳」の定義について

人間社会環境研究科人間社会環境学専攻
山 田 哲 也

On the Definition of Virtue in *Meno*

YAMADA Tetsuya

Abstract

As described at the beginning of *Meno*, the subject of it is “how is the virtue gained”. In process of the consideration of the subject, Plato insists on the superiority of knowledge to true belief, with the metaphor of Daedalus’s statue. Nevertheless, Plato says “virtue is not knowledge”, from the point of view that knowledge can be taught but virtue can not be taught. What did Plato identify virtue with in *Meno*?

In this paper, I will focus on the text after 86c4 and intend to identify the notion of virtue in *Meno* with true belief, from the three viewpoints, “it is useful or not”, “it can be taught or not” and “what is the origin of it”.

Keyword: *Meno*, Virtue, True Belief

問題の所在

『メノン』の主題は対話篇の冒頭でも示されているように「徳はいかにして備わるか」である。その問題を検討する過程で、プラトンは有名なダイダロスの比喻を用いて「知識」の「正しい思惑」に対する優越を主張する。しかし、それにもかかわらず、プラトンは「知識は教えられるが徳は教えられない」という観点から「徳は知識ではない」と主張する。では、『メノン』において「徳」と同一視されているものは何なのだろうか。

本論では、徳の定義の前段階として行われる「同じ相」¹⁾に関する議論や、メノンによって提示される「探究のパラドックス」²⁾といった議論が一通り完結して、「徳」という『メノン』本来の主題にかんする議論が展開される86c4以後の対話に着目して、それは有益であるか否か、それは教えら

れるか否か、それは何に起因しているのかという三つの観点から、『メノン』における「徳」の概念を、「知識」ではなく「正しい思惑」と同一のものとみなすよう試みる。

第一章 「徳」の候補としての「知識」の優越

『メノン』において議論の流れが徳の最終的な定義に向かって動き出すのは86c4以後である。この86c4という箇所は、メノンによって提示された探究のパラドックスを有名な「対角線の証明」によって克服した直後の箇所であるが、これ以後の部分、より具体的には、86c4-89b8の範囲で、「知識」が「徳」の有力な候補となりえるのではないかという議論が展開される。本章では、この箇所で開催されている議論を追いかけることで、『メノン』のなかで「知識」がどのような仕方ですべて「徳」

へと昇り詰めていくのかを確認する。

86c4-89b8の範囲で最初に行われるのは、「徳」について探究する際に用いる方法の特定である。

ソクラテスはその探究方法として、「もともとの問題に対する何らかの仮設を立てて、その仮設を検討することで最終的な結論を導き出す」という手法を用いることを提案し³⁾、メノンもそれを了承する。

その方法に基づいてソクラテスが最初に提示する仮設が「徳は知識ではない」である。

ここで、この最初の仮設について、Bluckは“The main hypothesis which Socrates makes in the Meno for the purpose of answering Meno’s question—his limiting condition that will allow ἀρετή to be διδασκτόν—is that ‘virtue is knowledge’.”⁴⁾と主張する。しかし、テキストを読むとブラックが『メノン』における仮設として主張している「徳は知識である」という命題が提示される前に、87b5で「もし徳というものが、知識とは異なった性格のものだとしたら、それは教えられうるだろうか、教えられえないだろうか?」ということがいわれる。

この部分は、その意味内容を変質させることなく、「徳は知識とは異なるものである。その場合、それは教えられうるか、それとも、教えられえないか」という仕方で表現することが可能である。そしてそのように考えるのであれば、「徳は知識である」というヒュポテシスの前に、「徳は知識とは異なるものである」というヒュポテシスが存在していたと考えることができるであろう。それゆえ、仮設を立ててそれを検討するというプラトンのやり方を遵守するのであれば、「徳は知識である」という命題は、「徳は知識とは異なるものである」というヒュポテシスを検討したうえで提出された結果であると考えべきであり、それ以後の議論はこの新たに掲出された結果である「徳は知識である」を新たな仮設とすることで展開される議論とみなすべきである。よって、以上のことからプラトンが最初の仮設として用意したものは、Bluckの主張する「徳は知識である」ではなく、「徳は知識ではない」であると考えるのは妥当である

う。

さて、この「徳は知識ではない」という最初の仮設が提示されたことを受けてソクラテスは、もしこの仮設が正しいならばそれは「教えられるか、それとも教えられないか」と問う。しかし、後々重要な意味を持つこの問いは、ここの段階ではさしたる議論もされないまま、「人間が教わるものは知識以外にありえない」という観点から、簡単に「徳は教えられるものであり、徳は知識の一種である」という結論が導き出されてしまう⁵⁾。

そしてこの第一段階の結論を受けて、ソクラテスはこの結論をより強固なものにすべく、「徳は知識であるのか、それとも知識とは異なる性格のものであるのか」という観点から「徳＝知識」という図式の再検討を行う。その際、ソクラテスは以下のような流れの議論を二つ展開する。

議論A

1. 徳は善きものである
2. それゆえ、徳を持つ人は善き人である
3. 善き人は有益な人である
4. 人は徳によって善き人になる
5. よって、徳は有益である

議論B

1. 健康、強さ、美しさ、富といったものどもは、それが正しく導かれた場合には有益であり、間違った仕方では導かれた場合には害である
2. それらのものを導くのは魂である
3. 節制、正義、勇気、ものわりのよさといった魂に属するものどもは、それが知によって導かれた場合には有益であり、無知によって導かれた場合には害である
4. 徳は魂に属するものであり、且つ、必然的に有益である
5. よって、徳は知である

この二つの議論⁶⁾のうち、プラトンは先ず議論Aによって徳の有益性を確認する。次に、議論Bの1から3によって、「諸々の事物を導きその有

益性を左右するのは魂、魂を導きその有益性を左右するのは知」という仕方です。「事物←魂←知」という導くものと導かれるものとの三層構造を確立する。そして議論Aによる徳の有益性の確認と議論B 1から3における三層構造の確立を経た上で、最終的に議論Bの4から5によって、あるもの(魂も含む)の有益性は全て知に依存するから「徳は知である」という結論を下す。

以上のようにしてプラトンは、一度目は「教授可能性」という観点から、そして二度目は「有益性」という観点から「徳=知識」という図式を確立させるのである。

第二章 「知識」に対する疑い

第一章で確認したように、プラトンは「徳=知識」という図式を確立させる。

しかし、プラトンはこの図式に対して、先にそれほど厳密な議論が展開されていなかった「教授可能性」という観点から疑いを持つ。

ここでプラトンが「徳=知識」という図式に対して疑いを持った理由は、「徳は知識ではない」という仮設から「徳は知識である」という第一段階の結論を出した際に、そこでなされた議論の過程が、ソクラテスによって「わざわざ問うまでもないこと」というコメント付きで提示された「人間が教わるものといえ、それは知識以外のものでない」という命題の確認作業だけであったという事実にあると思われるが⁷⁾、プラトンはこれ以後の箇所ですべて実際に「徳の教師の不在」という観点から「徳=知識」の再検討を行う。

『メノン』においてなされる「徳」に関する議論は、第一章でも示したように「仮設形成」という手段によって行われる。そして、プラトンは実際に徳の「可能性」について、「仮に徳が教授可能であるならば、徳の教師がいるはずである」という仮設を立てて⁸⁾、「徳の教師」の有無について対話に途中参加するアニュトスと議論を展開するのである。

「徳の教師」として、先ず持って槍玉に挙げら

れるのはソフィストである。しかし、彼らに関しては議論が尽くされることなく、ただひたすらアニュトスによる恨み節のような攻撃が展開されて、簡単に「徳の教師」の候補から引きずりおろされてしまう。

そして、ソフィストの失格を受けて、続いて引き合いに出されるのがテミストクレス(親)とクレオパントス(子)、アリスティデス(親)とリュシマコス(子)、ペリクレス(親)とパルロス・クサンティス兄弟(子)、トゥキュディデス(親)とメレシアス・ステパノス兄弟(子)という四組の親子である。

これら四組の親子は「親が有徳の人であり、尚且つ、徳が教えられるものであるならば、親は子供に徳を教えようとするに違いない」という観点から持ち出されたものである。つまり、この四組の親子を引き合いに出すことで、プラトンはソフィストに代る「親」という徳の教師の候補を提示しているのである。

しかし、プラトンはこれら四組の親子関係において、いずれも親の方を有徳の人物として高く評価し、子供達の方を人格的に親に劣る人物として評価していた。つまり、「人としてのよさ」(即ち、「徳」という点で、この四組の場合、親は子に「それを教えることができなかった」とみなしていたのである。だが、プラトンは、そのような評価を与える一方で、「人としてのよさ」以外の点ではこの四組の親が子供にある種の卓越性を身につけさせているという点に着目する。二組目のアリスティデス親子に関しては具体的な言及がないので省略するが、一組目のテミストクレス親子に関しては、馬上で立ったまま槍を投げるといった「騎士の技術」を身につけさせることに成功していると、三組目のペリクレス親子に関しては、ペリクレスは息子達にテミストクレス親子と同様の「騎士の技術」そして更には「音楽の技術」や「体育の技術」を身につけさせることに成功していると考え、四組目のトゥキュディデス親子においては息子達をクサンティアという教師に入門させることによって「レスリングの技術」を

身につけさせることに成功しているとみなしている⁹⁾。

そしてこのような具体例から、プラトンは「人としてのよさ」以外の「知識」は教授可能であるとし、仮に、知識が教授可能であるならば教授できなかった「人としてのよさ」(徳)は「知識」ではないという結論を下すのである。

さらに、この段階で、「ソフィスト」と「親」は両方とも「徳の教師」候補から退けられたことになる。つまり、「徳が教えられるならば、徳の教師がいるだろう」という仮設は、実社会における「徳の教師の不在」によって偽とみなされることになるのである。

このように、第一章でその確立が確認された「徳＝知識」という図式は「徳」の「教授可能性」という観点から否定されるのである。

第三章 「知識」にかわる「徳」の候補の提示と「知識」の新たな特徴

第二章で示したように、「徳＝知識」の図式は「徳は教えられない」という観点から否定された。それゆえ、『メノン』のこの段階までのところで、「徳」は「有益でありかつ教えられない」という仕方で定義されていることになる。そしてそのことを受けて、プラトンは、第一章で示した「事物←魂←知」という導くものと導かれるものとの三層構造において、事物と魂という「導かれるもの」を「知識」と同じように有益な仕方で「導く」ことができるものを探し始める。

つまり、「徳」が満たしているべき二つの条件である、他のものを正しく導くという意味での「有益性」と、「教師がいらない」という意味での「教授不可能性」を同時に満たしているものを探し始めるのである。

そして、その「徳」の新たな候補探しが行なわれる際に利用される具体例が「ラリサへの道案内」である。この具体例を用いることによって、プラトンは「思惑」「正しい思惑」「知識」の三つを比較検討する。この事例において「思惑」「正しい思

惑」「知識」の三つを持っている人は以下の三種類に分類される。

状況設定 ある人が知人をラリサまで道案内するパターン1…ラリサにいったこともなく、道を間違えて案内してしまう場合

この場合、この案内人はラリサへの行き方に関する「思惑」を持つ人

パターン2…ラリサに行ったことがないのに、たまたまラリサまで案内できた場合

この場合、この案内人はラリサへの行き方に関する「正しい思惑」を持つ人

パターン3…ラリサにいったことがあり、行き方を知っているがゆえに、ラリサまで案内できた場合

この場合、この案内人はラリサへの行き方に関する「知識」を持つ人

そして、この三種類の分類にしたがって、プラトンは「思惑を持つ人」「正しい思惑を持つ人」「知識を持つ人」の三つのうち、「思惑を持つ人」以外の二つ、即ち、「正しい思惑を持つ人」と「知識を持つ人」の両方に、「他者を正しく導いた」という点で共通の有益性を認めるのである。

このようにして、プラトンは「徳」の新たな候補として「知識」と同様の「有益性」をもつ「正しい思惑」を提示するのである¹⁰⁾。

さて、議論をここまで進展させたところでプラトンは、先に「教授可能性」という観点から否定された「知識」と「徳」の新しい候補である「正しい思惑」との更なる相違を指摘する。具体的には97d以後の箇所ということになるのだが、この部分でプラトンは「知識」が「正しい思惑」よりも高く評価されているという現状を示す。そして、「知識」が「正しい思惑」よりも高く評価されている理由、言い換えるならば、「知識」の「正しい思惑」に対する優越性について検討するのである。

これまで見てきたように、「正しい思惑」はその「有益性」という点では「知識」と比べても遜色ない。それゆえ、「知識」の優越性は「有益性」と

はことなる部分に求められなければならない。

そこで、プラトンが着目するのが「知識」と「正しい思惑」の両者における「原因の思考」の有無である。

それを示す際に、プラトンは「ダイダロスの像」という比喻を用いる。

ダイダロスによって作られた彫像は、極めて精巧にできているので何かで縛り付けておかないと動き回って逃げ出してしまふ。これがその比喻の具体的な内容である¹¹⁾。プラトンはダイダロスによる彫像を「正しい思惑」とみなし、それが常に正しくあることの根拠を「縛り付ける」という比喻によって表しているのだが、この「縛り付ける」という比喻によって表されている行為は具体的に何を意味するのだろうか。

プラトンいわく、この「縛り付ける」という比喻で表される行為は「原因の思考」である。プラトンはこの「原因の思考」について「これこそが想起なのだ」¹²⁾と語っているが、この「想起」という仕方でモデル化されている「原因の思考」とは具体的にどのようなものなのであろうか。

『メノン』において、「想起」の過程は80d5-86c3の範囲で示されているが、対話編中のソクラテスはこの「想起」と魂の不死とを結びつける際に、「もしこの子が人間であったときにも、人間として生まれていなかったときにも、同じように正しい思惑がこの子の中に内在していて、それが質問によってよびさまされたうえで知識となるというべきならば、…」¹³⁾という仕方で「想起」の概念をまとめている。この台詞を見る限り、プラトンにとって「正しい思惑」は「質問によってよびさまされた上で」という過程を経て初めて「知識」になるのであり、この過程を経ることが無ければ「正しい思惑」はどこまでも「正しい思惑」なのである。そして、仮にそうだとすれば、「正しい思惑」を縛り付けるものである「原因の思考」とは、「想起」において言われるところの「質問によってよびさまされた上で」の部分であると考えることができる。

この「質問によってよびさまされた上で」の部

分は、ソクラテスと召使の子供によって展開された議論の内実をみる限り、その議論展開は常に子供がある特定の事柄について知っているということを確認したうえで、質問者であるソクラテスに回答者である子供が何らかの答えを述べるという方法をとっていることから、ここでの議論の方法は『メノン』の75dで言われるところの「質問者が知っていると同もって認めるような事柄を使って答える」という「問答法の約束」にのっとってなされたものと考えることができる。

それゆえ、以上のことからプラトンによって「想起」と同一視されている「原因の思考」とは、「問答法の約束」にのっとった議論ということになるだろう。

そしてプラトンは、この「問答法の約束」にのっとった議論、すなわち、「原因の思考」による縛りつけが行われているのか否かを基準として、「正しい思惑」に対する「知識」の優越を主張するのである

つまり、プラトンはこの「原因の思考」の有無が「知識」と「正しい思惑」の相違点であると主張するのである。そして、この相違点の提示により、「知識」と「正しい思惑」の両者は「教授可能性」と「原因の思考」という二つの点において異なることになるのである。

第四章 「正しい思惑」と「徳」の共通点

第三章では、プラトンが「原因の思考」の有無という観点から「知識」と「正しい思惑」の相違をさらに強調しているということを確認したが、99a7-100c2において、プラトンは「原因の思考」という「縛りつけ」がないという点で「知識」よりも劣っているとみなされた「正しい思惑」を「神」という高次のものと結びつける。

その際に、プラトンは、「徳」の「教授可能性」を否定する際に登場したテミストクレス等の偉大な政治家達を再び取り上げて、この人々を、「知識」によって他者を導いた人々ではないと規定する。プラトンが彼らに対してこのような考え方を

持つのは、それ以前の箇所を確認されていた「徳は教えられない」という事実である。

人々を正しく導くことができるおおもとの原因が徳であり、尚且つ、テミストクレス達が知識によって人々を正しく導いてきたのだとすれば、「徳＝知識」である。また、「知識」が「教授可能」であり、なおかつ、「知識」が「徳」であるならば、テミストクレス達はその子に必然的に「徳」を伝達したはずである。しかし、そうであるにもかかわらず、彼らは子供に「徳」を伝達していない。だが、彼らは現実には他者を正しく導いた。よって、他者を正しく導くおおもとの「徳」は「知識」ではなく、彼らもまた、「知識」によって他者を導いたのではない。このような議論に沿って、プラトンは彼らを「有徳の人物」と認めながらも、同時に、「知識」によって人を導いた人物ではないとみなすのである。

では、彼らは何によって他者を正しく導いたのか。プラトンはこの問いに対して「もし知識によるのではないとすると、残るところは、思惑のよさによるということしかないことになる」¹⁴⁾と主張する。そして、プラトンはこのような仕方政治家達が他者を正しく導いた原因を示したすぐ後の箇所で突然、これまで一切言及されてこなかった「神託を伝える人」¹⁵⁾という職業(?)を提示し、その「神託を伝える人」とテミストクレス等を同様の人物とみなすのである。

「神がかりの状態になって自分自身では何を言っているのかわからないまま、色々と正しいことを述べる人」¹⁶⁾、これが『メノン』で提示されるプラトンの「神託を伝える人」の定義である。プラトンは、この「自分自身では何を言っているのかわからないまま、色々と正しいことを述べる」という点をテミストクレス達と同一視するのだが、プラトンは何に基づいてこの両者を同一視するのであろうか。

先に見たように、政治家達が他者を正しく導くのは知識によるのではなく思惑のよさによるのであった。これを言い換えると、「原因の思考」という「縛りつけ」が行われていないものによって他

者を正しく導いているということになるのだが、プラトンはこの点に着目する。つまり、「神託を伝える人」が発する言葉にも「原因の思考」という「縛りつけ」はなされていないのだから、その意味で両者が他者を導いている媒介は同種のものであり、その同じ媒介を使って他者を導いているという点で、プラトンは「神託を伝える人」と政治家達を同一視するのである。

さて、このようにして、他者を導く際に用いる媒介の同一性という観点から、政治家達と「神託を伝える人」は同等の物とされるのだが、このような同一視がなされた後で、プラトンは「神託を伝える人」だけでなく、政治家達までも「神のような人」とのべる。そしてそれだけではなく、政治家達が他者を正しく導く弁舌を行う過程についても「神託を伝える人」と同様に、「神から靈感を吹き込まれ、神に乗り移られている」のだと主張するのである¹⁷⁾。つまり、プラトンは、政治家達と「神託を伝える人」について、同じ媒介を用いて同じ過程をたどって他者を正しく導いているとみなしていることになるのだが、このことは同時に、プラトンが、政治家が他者を正しく導く際にそれに負っているものであるところの「正しい思惑」は神託と同じように神に起因していると考えていたということを意味する。

そして、「正しい思惑」の出所を特定したところで、プラトンは「徳はいかにしてそなわるのか」というメノンのもととの問いに対して「神の恵みによって備わるもの」¹⁸⁾という回答を与えるのである。

もともと、この『メノン』という対話篇は冒頭のメノンの台詞¹⁹⁾を見てもわかるように、「徳はいかにして備わるのか」という問題を主題として展開されたものであった。この「徳はいかにして備わるか」という問いは、メノンによって示された「探究のパラドックス」に対するソクラテスの論駁が終わった段階で、再度、メノンによって再提示される。この主題の再提示は、ともすれば「それは何であるか」という本質の方向に向かおうとするソクラテスの探究を、再び本来の主題に戻そ

うとするものである。このことは『メノン』における主題が他の対話篇のように「それは何であるか」を探求するものではないということを強く印象付ける。

実際、『メノン』においては、「徳」について「これについて本当に明確なことは、いかにして徳が人間に備わるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問いを手がけてこそはじめてわれわれは知ることができるだろう」²⁰⁾と主張され、読者に対して、あたかも、「徳」というものの全般について結論が保留されているかのような印象を与える。しかし、『メノン』のなかでは「徳」に対してこのように保留を意味するような結論が提示されている一方で、同時に、「神の恵みによって備わるもの」という結論も提示されているのである。

この二つの結論は、「徳」についてプラトンが何かダブルスタンダード的な態度を取っていたということの意味するものでは決してない。むしろ、この結論を提出することを保留するかのようなプラトンの言明は、結論の保留を意味するものではなく、文字通り、『メノン』という対話篇においては「徳それ自体はそもそも何であるかという問いを手がけ」ていないということの意味しているのであって、対話篇本来の主題であり、冒頭でメノンによって提出された「徳はいかにして備わるか」という問題に関しては、「神の恵みによって備わる」という結論が提出されているのだと解釈されるべきであろう。

さて、以上のことから、「徳」と「正しい思惑」は第一章から第三章までの議論で提出された「有益性」「教授不可能」という二点にさらにもう一つ、その出所という意味での「神」という要素を加えて合計三つの共通点を得たことになる。この新たな共通点の追加によって、「正しい思惑」が「徳」の候補としてきわめて有力な地位を確保したと同時に、「知識」は「徳」から大きく遠ざかったとみなすことができるであろう。

しかし、プラトンが『メノン』の全体にわたって、明確に区別するよう勤めてきたと思われる「正

しい思惑」と「知識」を同一視する見解が存在する。それは、Fineによって提出されたものでありFineは「知識」を「正しい思惑」がレベルアップしたもののみなすことで、両者の間に本質的な違いはないと主張する²¹⁾。

より具体的にいうと、Fineの主張では、『メノン』における「知識」とは「正しい思惑」が「原因の思考」という縛りつけによってレベルアップしたものであり、本質的には「思惑」の一種であるとされる。

確かに、『メノン』の議論を厳密に追いかけると、Fineのような解釈は妥当なものであろうし、筆者としてもこの解釈を否定するつもりもない。また仮に否定しようとしたとしても筆者はその根拠を持ち合わせていない。しかし、仮に、Fineの見解を中心にすえて、「知識＝レベルアップした正しい思惑」という図式に基づいて『メノン』における徳の問題を解釈しようとすると多少の問題が生じるであろう。

「知識＝レベルアップした正しい思惑」とした場合、「知識」ももとは「正しい思惑」であったという点で、それは本来「神」に起因するということになる。そして「神の恵みによって」備わった後で、人間の手によって「縛りつけ」がおこなわれ、より質の高いものへと進化したということになるのだが、そのように考えた場合、『メノン』のまとめ部分でプラトンが提示している、「神」にまつわる議論が無意味なものになる。

本章で見てきたように、問題となっている「神」にまつわる議論の箇所は、それ以前の段階で明確に「知識」をもたないと規定されたテミストクレスをはじめとする政治家達と、神がかりというある種のトランス状態で神託を伝える人々が示されたうえで、それらの人々が持っている「正しい思惑」や「神託」が「神」に由来するものであることを示している箇所である。

それゆえ、仮に、Fineのように「知識」も「正しい思惑」も本質的に同質のものと考えるのであれば、ここでプラトンがわざわざ「知識」を持たない人を持ち出してきたことが無意味になるであ

ろうし、また、この「神」にまつわる議論の箇所が最終的に「徳」の出所を示す役割を担っているということを考えると、「教授可能性」という点で先に明確に「徳は知識ではない」といわれた「知識」が、「正しい思惑」と同様に「神」に起因するとされることで再び「徳」に近づいていると考えるのは明らかに不自然であろう。さらに、「知識＝レベルアップした正しい思惑」であるならば、『メノン』のなかで「徳は知識ではない」とされている点で、プラトンはより程度の低いものに「徳」との共通点を認め、より程度の高いものを「徳」の候補として退けているということになる。仮にそうだとするならば、プラトンは「徳」というものの価値を「知識」よりも明らかに低く見ていたことになるだろう。しかし、『ラケス』など他の対話篇を見てもわかるように、プラトンにとって「徳」は著作の重要な主題の一つとして機能していた。それゆえ、いかに「知識」が程度の高いものであったにしても、そのような重要な主題の一つが簡単に他の事柄よりも劣っているとみなされていると考えるのはおかしいことであろう。

Fineの議論はもともと、プラトンの学説がイデアの世界とこの世界という紋切り型の二元論を規準に解釈されることへの批判から派生しているものであり、その点に関しては筆者も異を唱えるつもりはないが、「知識」と「正しい思惑」を本質的に同一のものとするという点に関しては慎重になるべきではないだろうか。

結論 『メノン』における「徳」と「正しい思惑」の同一化

これまでの議論で、対話篇『メノン』のなかでは「知識」と「正しい思惑」という「徳」の二つの候補が提示され、両者はその「有益性」という点では「徳」との共通点を認められていたものの、「知識」はそれが「原因の思考」によってそれを持つ人のうちに「縛りつけ」がなされたものであり人間相互間で「教授可能」とあるという点で「徳」とは別のものとみなされていた。だが、それとは

逆に、もう一方の「徳」の候補である「正しい思惑」はそれが人間相互間で「教授不可能」であり「神」という高次の存在からその恵によって人間に与えられるとされている点で同一のものとみなされていた。

『メノン』の最後でプラトンが主張しているように、確かに、この対話篇のなかでは「徳とは何であるかという問い」が手がけられておらず、「徳」の本質という意味では結論の提示が保留されていると考えるべきであろう。しかし、ソクラテスの対話相手であるメノンが対話篇の冒頭から終始知りたがっていた「徳はいかにして備わるのか」という問題については、プラトンが提示した「神の恵みによって備わる」という主張をその問題の解答として解釈するべきである。

そして、そのように考えた場合、「徳」と「正しい思惑」は「いかにして備わるか」という点で同一のものとみなされていた、すなわち、「徳=正しい思惑」という図式が確立されていたと考えるのが妥当であろう。

「いかにして備わるか」という限定的な側面に対してのみであれ、この「徳=正しい思惑」という図式が『メノン』において成立しているという事実について、藤沢は、ソクラテスが示した「徳は知である」という主張も考え合わせうえて、「かなり奇妙な」と評し、この図式が示す結論はプラトンの真意ではないと主張する²²⁾。そして、「徳」と「知識」が「教授可能性」という点で別のものとされた個所に言及し、「徳を教える人が現実には存在しない」ということから「徳は知識として教えられうるものではない」という結論を導き出すプラトンの議論に誤りを見出している。

この点に関する藤沢の解釈をまとめるとおおよそ以下ようになる。

「徳を教える人が現実には存在しない」という命題から導き出される結論は「徳は現実には教えられていない」であり、かつ、「徳は知である」というソクラテスの主張も真実である。

↓

真の知であるような徳こそが唯一本当の徳であり、そのような徳こそが他者に教えられるものであるのだが、これまで、例え偉大な政治家であったとしてもそのような真の徳を備えた人が存在しなかったということを意味する。

↓

それゆえ、真の徳を備えておりかつその真の徳を他者に伝えることができるような優れた政治家、すなわち、哲人政治家が要請されなければならない。

つまり、藤沢は、ここに示したような哲人政治家に関する主張こそが『メノン』におけるプラトンの真意であり、対話編中の議論において成立しているように思われる「徳=正しい思惑」の図式は、表面的な結末としての歪められた結論とみなすのである。

確かに、藤沢の主張は、『メノン』という対話篇をプラトンの師であるソクラテスの主張や『国家』において主張されている哲人政治家の概念と結び付けているという点で、プラトンの学説全体を包括的に検討したうえで提出された解釈と考えることができる。

しかし、プラトンの『メノン』執筆に先立つソクラテスの主張はともかくとしても、執筆順として『メノン』の後に来るであろうとされる『国家』の主題である哲人政治家の概念が『メノン』の段階ですでにプラトンの内に想定されていたかどうかは疑問である。また、藤沢の解釈は、プラトンのテキストに現れていない「真意」を読み取るものであることから、そこには当然、藤沢自身が『メノン』で展開されるプラトンの議論には「真意」が隠されているはずだと考えるきっかけが存在しているはずである。現に、藤沢は、「徳」の「教授可能性」に関するプラトンの推論ミスを見つけとして、『メノン』に隠された「真意」を読み取るのであるが、この推論ミスから「真意」という隠されたものを読み取るということは、プラトンに推論ミスの自覚があったということを前提としている。確かに、藤沢の指摘するプラトンの推論ミ

スは単純なものであるが、しかし、そうだからといって、プラトンがその推論ミスに自覚があったとはいえない。実際、この推論ミス以後の箇所で開催されている議論は、この推論ミスによって引き出された結論、すなわち、「徳は知識として教えられうるものではない」に基づいて展開されているのである。

それゆえ、プラトンの学説全体を基準にして『メノン』を解釈するのであれば藤沢のような解釈も可能であろうが、哲人政治家のような『メノン』の後に明確化される概念を用いずに純粋にテキストで言われている事柄だけをもちいて解釈した場合、筆者が本論で主張したように、『メノン』においては「徳=正しい思惑」という図式が成立しているとみなすことは不可能ではないし、『メノン』の解釈としても「徳=正しい思惑」という図式は一定の正当性を持つであろう。

注

- 1) 『メノン』の冒頭70a1-74b2の部分で展開される「徳とは何であるか」に関する議論で、メノンは個々人によって異なる多様な徳を答える。それに対してソクラテスが求めるのが徳と呼ばれるもの全てに共通する「同じ相」である。

この「同じ相」に関しては対話篇の前半部分、具体的には、70a1-77a2を費やしてそれがどのようなものであり、また、どのような仕方で答え方がその「同じ相」を表現するにふさわしいのかということが検討される。

なお、この「同じ相」という表現も含めて、本作で『メノン』の邦訳を何らかの仕方でも引用する場合には、特別な言及がない限りは岩波文庫に収録されている藤沢令夫訳に従う。

- 2) 80d5-86c3の箇所ではメノンによって提示されるパラドックスであり、具体的には、

おや、ソクラテス、一体あなたはそれが何であるかがあなたに全然わかっていないとしたら、どうやってそれを探究するおつもりですか?というのは、あなたが知らないものの中で、どのようなものとしてそれを目標に立てた上で、探求なさろうというのですか?あるいは、幸いにしてあなたがそれを探り当てたとしても、それだということがどうしてあなたにわかるのでしょうか——もともとあなたはそれを知らなかったはずなのに。

という仕方でも表現される。

このパラドックスを解消する際に、ソクラテスは「魂は不死であり、かつ、魂は全てのことを知っている」と主張し、その魂がすでに学んでしまっていることを「想起」することが「学び」であるとする。そして、それらの一連の主張を具体的に示す方法として、メノンの召使の子供と四角形の対角線に関する議論を展開する。

- 3) 探究におけるこのような方法論は86d3-87c3でなされるソクラテスの主張の中で提示される。その際、ソクラテスはこのやり方について「幾何学者達が用いるような方法」と述べている。
- 4) Bluck, R. S., *Plato's Meno*, Cambridge University Press, 1964のp. 86を参照。
- 5) 「徳は教えられるものであり、徳は知識の一種である」という命題が真であることは87b6-87c7で展開される議論で確認される。
- 6) この議論Aと議論Bは87d-89b8で行われる一連の議論を筆者が簡潔にまとめたものである。
- 7) この「人間が教わるものといえば、それは知識以外のものでない」という命題は86c1-3で提示されている。なお、『メノン』のこの段階では、プラトンはこの命題についてソクラテスに「わざわざ問うまでもないことであって (de'lon hoti)」と語らせている。
- 8) この仮設は89d3から始まるソクラテスの台詞の中で提示される。
- 9) これら四組の親子関係に関する言及は93b6以後のソクラテスとアニュトスの対話を参照。
- 10) この章で筆者が簡潔にまとめた「ラリサへの道案内」の例や、そこから導出される「正しい思惑」の性質に関しては97a9以後を参照。
- 11) ここで示したダイダロスの比喻に関する議論は97d6-98a9を参照。
- 12) 98a3-4。
- 13) 86a6から始まるソクラテスの台詞を参照。
- 14) 99b11。
- 15) 99c3。
- 16) 本論で筆者が示しているプラトンによる「神託を伝える人」の定義は、99b11-c5のソクラテスの台詞を筆者が簡潔に言い換えたものである。
- 17) 政治家を「神託を伝える人」と同一視する一連の

主張は99c11から始まるソクラテスの台詞を参照。

18) 99e6。

19) 『メノン』の冒頭で、メノンは以下のように主張し、

「こういう問題に、あなたは答えられますか、ソクラテス。——人間の徳性というものは、はたして人に教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んでも得られるものではなくて、人間に徳がそなわるのは、生まれつきの素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか……。」

ソクラテスに「徳」はいかにして備わるのかという問いを提示する。

20) 100b4-6。

21) 本論中で言及するFineの主張に関してはFine, G., "Knowledge and True Belief in the Meno", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* vol.27, edited by David Sedley, 41-79. Oxford University Press, 2004を参照。

22) 本論で言及する藤沢の主張については、岩波文庫版『メノン』の巻末に収録されている訳者である藤沢自身による解説を参照。

参考文献

- Bluck, R. S., *Plato's Meno*, Cambridge University Press, 1964.
- Fine, G., "Knowledge and True Belief in the Meno", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* vol.27, edited by David Sedley, 41-79. Oxford University Press, 2004.
- Fujisawa, N., 『プラトンの哲学』, 岩波書店, 1998.
- Klein, J., *A Commentary on Plato's Meno*, The University of Chicago Press, 1989.
- Plato, *Platonis Opera* vol.3, Oxford University Press, 1903.
- , *Plato Laches Protagoras Meno Euthydemus*, Loeb Classical Library, translated by W. R. M. Lamb, Harvard University Press, 1924.
- , 『メノン』, 岩波文庫, 藤沢令夫訳, 岩波書店, 1994.